

□文献紹介□

中等症から重症の成人アトピー性皮膚炎患者に対するデュピルマブを用いた治療

IL-4 と IL-13 を阻害する完全ヒトモノクローナル抗体であるデュピルマブ(dupilumab)は、好酸球増多を伴う喘息の患者で有効性が認められている。Th2 細胞を介して誘導されるこれらサイトカインをデュピルマブにより阻害することは、アトピー性皮膚炎などの Th2 関連疾患の治療に有用である可能性がある。

本論文では、局所ステロイド外用およびカルシニューリン阻害薬による治療にもかかわらず中等症～重症を呈する成人アトピー性皮膚炎患者を対象に、ランダム化二重盲検比較試験を行い、デュピルマブの有用性につき評価している。デュピルマブを単剤療法として投与する 4 週間の試験 2 つと、12 週間の試験、さらに局所ステロイド外用と併用する 4 週間の試験で評価を行い、湿疹面積・重症度指数(EASI)、研究者による総合評価指数、瘙痒、安全性評価、バイオマーカー値(血中 TARC, IgE)を評価項目とした。

単剤療法による 4 週間、12 週間の試験では、デュピルマブ投与により、臨床指標、バイオマーカー値に迅速かつ容量依存的な改善を認めた。すなわち、EASI の 50% 低下が達成された患者の割合(EASI-50)は、デュピルマブ投与群の 85% に対し、プラセボ投与群では 35%、研究者による総合評価指数が 0～1(寛

解もしくは寛解に近い状態)であった割合は、デュピルマブ投与群の 40% に対し、プラセボ投与群では 7%、瘙痒の低下はデュピルマブ投与群の 55% に対し、プラセボ投与群では 15% であった。併用試験では、デュピルマブ投与+局所ステロイド外用群において、ステロイド投与量が非常に少なく済んだにもかかわらず、EASI-50 の達成率が 100% だったのに対し、プラセボ投与+局所ステロイド外用群では 50% の達成率であった。なお、有害事象はプラセボ投与群で多く、デュピルマブ投与群では鼻咽頭炎と頭痛の発現頻度が比較的高かった。

以上より、アトピー性皮膚炎に対するデュピルマブの単独投与と局所ステロイド外用との併用療法の有効性が示され、安全に使用できる可能性が高いことが示唆された。

Beck LA, et al: Dupilumab treatment in adults with moderate-to-severe atopic dermatitis. N Engl J Med 371:130-139, 2014

(慶應義塾大学 八代 聖)